山口・安養寺遺跡

1 所在地　山口県下関市長府安養寺町

2 調査期間　一九八一年（昭56）一一月～一二月

3 発掘機関　下関市教育委員会

4 調査担当者　伊東照雄・山内紀嗣・水島稔夫・村田多津江

5 遺跡の種類　集落跡

6 遺跡の年代　平安時代～室町時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

安養寺遺跡は淮提峯の東側山麓地の緩傾斜面に立地する。長門国府跡の北西方、長門国分寺跡の北側にあたり、また長門鋳銭所跡の東側に接している。

（安岡・小倉）

長門国府跡及び国分寺跡の北限域の確認のために遺構分布調査を実施した結果、平安時代から室町時代前期までの、掘立柱建物跡や溝状遺構などからなる集落跡を検出した。この内、LD一二五と呼ぶ東西方向の大溝は、幅約三mを測り、平安時代中頃までには掘開されて、室町時代前期まで継続的に機能していた。

木簡一点は、LD一二五の埋積土から出土した。共伴遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・土製品（坩堝・土錘）などがあり、それらの年代からみると、木簡は平安時代後期に属するものと判断される。

8 木簡の釈文・内容

(1)　＜×□子〔籾カ〕□一石　(132)×(19)×6　039

木簡はスギ板目材を用い、上端部及び下部ともに欠損しているものの、長方形の材の一端の左右に切り込みをいれた形式であることがわかる。木質地の遺存状態はかなり悪い。墨書の内容から、近接の長門国分寺あるいは長門鋳銭所の経営のために調進された穀物に付されたものと推測される。

なお、木簡釈文の作成及びその内容について、山口大学八木充氏、福岡県立九州歴史資料館倉住靖彦氏から多大の御教示を得た。

9 関係文献

下関市教育委員会『長門国分寺―長門国府周辺遺跡発掘調査報告V―』（一九八二年）

（水島稔夫）